

平成29年度 地域でつながる家庭教育応援事業

# 親子の学び応援講座 (福島第三中学校区PTA)

日時：平成29年11月24日(金) 13:15~14:55  
場所：福島第三中学校 第Ⅱ体育館

講演「Impossible を I'm possible へ (不可能を可能へ)」

講師 特別非営利法人日本ブラインドサッカー協会

ブラインドサッカー日本代表 加藤 健人 氏

スマホやSNS等のメディアの時代、人間関係の希薄化や将来へ向けた目的意識の欠如などが問題となっている。困難なことがあっても、自分の夢や目標に向かって、進んでいこうとする態度や、人を思いやる気持ちを高めていけるよう、ブラインドサッカー日本代表の加藤健人氏を講師に、講話や実技体験を交えた本講座を実施することとした。

## 【講演の概要】

### 1 【講演】

- 自分のことを「カトケン」と呼んでほしい。今日の講話や体験を通して、自分だったらどうかな？自分だったら何に生かせるかな？という気持ちで聞いてほしい。
- カトケンとは、後天性の病気で目が見えなくなった。それまでは、何でも見える状態で日常生活を送っていた。小学校3年のときにJリーガーにあこがれて、サッカーを始めた。中学校も高校もサッカー部だった。高校3年のとき、部活で人とぶつかって目が腫れた。片方の目が見えにくかったので、眼科で検査をした。そのとき、レーベル病という遺伝性の病気であることが分かった。今の医学では治らない目の病気だった。幸い、効き目ではない方の目だったが、見えている方の目も視力が落ちていく不安があった。カトケンの視力は次第に落ちていった。
- 「ブラインドサッカーを知っている人？」(⇒会場から少し手があがる) 「逆に知らなかった人？」(⇒会場から多めに手があがる)。
- 今は、両目の視力が落ちてしまい、もう見ることができない。でも、光は感じられる。みんなが軽く目をつぶった状態。人が動く気配を感じることができけれど、うなずいたり、首をかしげたりされても、カトケンには分からない。だから、音や声でカトケンに分かるように伝えてほしい。
- 「ブラインドサッカーを知っている人？」(⇒会場から拍手) 「逆に知らなかった人？」(⇒会場から拍手)。拍手の音でカトケンに伝わったことがある。それは、この会場にたくさんの人がいるということ。このように、相手のことを考えて伝えることが大切。それが、ブラインドサッカーには、とても重要なこと。
- 自分のまわりに視覚障がい者がいるよという人？  
(⇒拍手はない)  
自分のまわりに障がいをもった人がいるよという人？  
(⇒少しの拍手)  
自分のまわりに普通の人がいるよという人？  
(⇒大きな拍手)



- 日本に多い4つ名字（佐藤、鈴木、田中、高橋）の人がいるけれど、実は、障がいをもっている人も、その4つの名字の人たちと同じ割合でいると言われている。でも、町には出てこない。町に出にくくなっている現状がある。カトケン自身のまわりにも、視覚障がいの人はいなかった。だから、目が不自由になったとき、この先どうなるのか分からなかった。相談相手がいなかった。
- カトケンには、視覚障がい者の勝手なイメージがあった。みんなは、どんなイメージがあるか、まわりの人と話し合っほしい。  
Aさん（⇒一人で出歩くのが難しいというイメージ）  
Bさん（⇒日常生活で他の人の手がないと生活できないイメージ）
- カトケンは「障がい者＝何もできない人」というイメージがあった。障がいのある人を偏見の目で見ていたし、話したこともなかった。だから、目に障がいをもってから、まわりの人に偏見の目で見られているんじゃないかと、自分で壁を作っていた。学校も休みがちになり、見えるようになりたい、もとに戻りたいってずっと思っていた。
- 高校卒業後は、ずっと家の中にいた。どんな毎日だったか覚えていないくらい、辛い時期だった。何もできないカトケンを見て、両親が何かできるものはないかと探してくれた。それが、ブラインドサッカーだった。
- 普通の人ってみんな言うけれど、「普通」って何？「普通の人」って誰？何はできたら、普通の人なの？ どういう人が普通の人なの？また、話し合ってみて。
- Cさん（⇒何不自由なく生活できる人）  
じゃあ、Cさんは普通の人？（⇒はい）  
カトケンは普通の人じゃないの？（⇒・・・）
- Dさん（⇒何不自由なくしっかり生活できる人）  
じゃあ、カトケンは？（⇒う～ん・・・）
- 今、思うのは、カトケンはただ見えないだけ。それ以外は、普通。一人で新幹線も乗ってこられたし、結婚もしている。日常生活はできている。見えないけれど、人よりできることもある。みんなそれぞれ違うから、人それぞれが普通なんだと思う。好きなことも嫌いなこともある。得意なことも、不得意なことも違う。だから、人と人とを比べる必要はない。
- 今の自分にはできなかったとしても、やり続ければできるようになることがある。できなくても工夫すればできることはある。それでもできなかったら、別な何かに挑戦すればいい。怖がらずに何にでも挑戦して欲しい。



## 2【実技体験】

### (1) ブラインドサッカーの説明

- 5人制で行う。フットサルのルールを工夫してルールが作られた。
- 視覚障がいの程度が一人一人違うので、アイマスクをして競技を行う。アイマスク4人、キーパー、ガイド、監督がいる。
- ボールを振るとマラカスのような音が出る。中に鉛が入っている。
- ディフェンスは「ボーボー」と声を出す。オフェンスは、その声を聞いてパスやドリブルをする。

### (2) 実技体験（男子10名、女子10名の代表生徒）

- ブラインドサッカーで、コミュニケーションは非常に大切。ガイドの人が、相手の立場に立って指示や音を出さないとパスやドリブルはできない。  
(⇒カトケンの8の字ドリブルを生徒がアシスト。カトケンが動きやすいように指示を出す体験をした。)
  - アイマスクをして、グループ分けをします。どんな方法でもいいから分けてください。最初に、誕生日が、1～6月のグループと7月～12月のグループに分かれます。  
(⇒それぞれの声が響き合い、時間がかかる。)
- 声を出すタイミング、声の大きさを考える。言い方も考える。例えば「上半期の人」とか。どうしたら、相手に伝わるか相手のことを考えて、声を出すことが大切。

- アイマスク体操をします。カトケンの動きを相手に伝えてください。  
(⇒膝回しやラジオ体操の動き、ストレッチなど、様々な動きをアイマスクをつけている友達に言葉でつたえる体験を行った。)
- 「ねえ、ねえ」とか「あのさ」とか言うけれど、みんなには名前があるんだよ。「あれ」「これ」「こうして」「あっち」などは、目の不自由な人には伝わらない。例えば、膝回しだったら、「手を膝に当てて大きく膝をぐるぐる回してください」と言うのと伝わる。自分の考えを伝えるだけではなくて、相手の立場を考えた上で伝えることが必要。「伝える」と「伝わる」は違う。  
(⇒その後、パスされたボールをトラップをしてシュートする体験を行った。相手がとりやすいようにパスしたり、ゴールの位置を指示したり、相手の立場を考えた動きが見られた。シュートできたときの表情はみんな笑顔だった。)



### (3) まとめ

- カトケンは、「始めなければ、始まらない」という言葉を大切にしている。苦手なことやできそうもないことを、やらなかったり、あきらめたりしていないか？カトケンも、目が見えなくなって、何もできないと思っていたけれど、資格をとったり、仕事をしたり、一人暮らしをしたり、挑戦すると何でもできた。あのとき、こうすればよかったと後悔してほしくない。やる前に考えるのではなくて、自分がやりたいことに挑戦すればいい。カトケンは東京パラリンピックでのメダルを目指す。
- 辛くて悩んだり悲しんだりすることもあるけれど、足を止めてまわりを見ると、解決のきっかけはある。困難を乗り越えるきっかけ、夢へのチャンスは必ずある。夢に向かって進んでいってほしい。

### ★ 参加者の声

- 「普通って何？」という質問に、とても考えさせられました。自分自身、よく「普通でいいから」と言ってしまうのですが、実はその言葉の意味を理解していないまま安易につかっていたことに気づき、とても恥ずかしくなりました。「始めなければ始まらない」という言葉も心に残りました。
- 心にしみる大変いい講演会でした。障がいをもったことで、困難もたくさんあったと思います。でも、それを乗り越えて、日本代表として活躍されている姿は、中学生に大きな勇気と刺激を与えたと思います。
- 目がほとんど見えなくなった時には、ものすごい絶望感に襲われたことだと思います。それを少しも感じさせずに、今を生き生きと生活している姿に、とても感動しました。何事にも恐れずに挑戦していこうという勇気と希望を得ることができました。本当にありがとうございました。
- 目が見えなくなるという逆境の中で、ブラインドサッカーに出会い、明るく前向きに頑張っている話を聞いて、自分に自信をもって生きていく勇気を学びました。目が正常に見える自分は、もっともっと何かができるのではないかという気持ちになりました。
- 講演も実技体験も分かりやすく、とても良かったと思います。「カトケンは普通の人じゃないの？」という問いかけは、私自身も、どう答えてよいのかと考えさせられました…。



※ スマホ社会の今、個人主義の傾向が強くなり、人間関係の希薄化や人を思いやる気持ちの不足、コミュニケーション能力の低下などが叫ばれている。そのような社会の中、加藤氏の講話や実技体験は、子どもたちや保護者の心に忘れかけていた熱いものを思い出させてくれた。参加者みんなが、自分の生き方を振り返り、前を向いて進んでいく力をもらった素晴らしい時間だったと思う。